

変わらないこと

東京都立桜修館中等教育学校五年（東京都）

林 莉央

私たちの世界は絶えず変化する。この当たり前の事実を、この一年半の間で何度実感したことだろう。

私たちはこの絶えず変化する世界の中で必死に生きていく。だから、人は何かある度に過去と現在に一喜一憂し、自分の未来について悩むのではないか。今まで当たり前だったことが当たり前ではなくなった今、自分を取り巻く環境を客観的に見られるようになった。自分も、友達も、家族も、日本も、一年半前と比べて大きく変化していることに驚いてしまう。

しかし私にとって一つだけ変わらない世界がある。当たり前前のようにお釜があつて、畳の匂いがして、美しいものを言葉が無くても共有できる、そんな世界。そう、私にとつての茶道の世界は、習い始めてから今に至るまで一度も変わったことがない。

茶道を「変わらない世界」と表現するのには、少し語弊

がある。しかし、茶道はいつでも私を温かく優しく迎え入れ、刻々と変化する世界を忘れさせてくれる。そういう意味で、変わらない世界であり続けてくれる。もちろん、現在私が所属する茶道部では、多くのことが制限されている。しかし、茶道の本質は、変わらず私たちの中にある。

「茶道の本質は変わらない」。そう強く感じた出来事があった。今年の十一月、教育実習生の方々が学校に来ていた時のこと。顧問の先生が、実習生の方をおもてなしする機会を与えて下さり、急遽お茶会を開くことになった。中学生は活動時間に制限があったため参加できず、高校生二人で開く必要があった。私は、半東と水屋の両方を担当することになり、半東として動きながら、六人分のお茶を点てた。正直最初は無理だと思った（完璧なおもてなしはできないと思った）。しかし、お客様が待っている和室の扉を開けた瞬間、そんな私の気持ちは一変した。お客様全員が笑顔で、期待を込めた目で、私の方を振り向いてくれたからだ。

実習生の方とほとんど会話をしたことがなかったのに、なぜだろう、泣きそうなくらいうれしかった。理由はきっと、久しぶりにお茶会ができるからではない。おもてなしは人をこんなにも幸せにするということを思い出したからだ。茶道が生み出す一体感が心地良かったからだ。そして、二人でお茶会を開き、感染症対策を徹底する必要がある

るなど、いつもと全く違う状況でも本質は変わらないことに気付いたからだ。だから私は、このお茶会を通して、このお客様を幸せにしたいと心から思った。そして、この気持ちで六人分のお茶を点てることさえも楽しんでしまった。

茶道は、私にとっても、皆にとっても、変わらない存在であり続けるように思う。なぜなら、おもてなしを通じて一体感を感じる美しさにおいて、今も昔も変わらないからだ。そんな茶道に、今までどれほど支えられてきただろう。つらい時の自分も、嬉しい時の自分も、どんな自分でも受け入れてくれたことに感謝してもしきれない。

茶道と共に歩んだ五年間に、一度終止符を打つ時が迫っている。一度離れても、また戻ってくるだろう。そして、いつまでも、茶道に対する私の気持ちは変わらない。そんな気がする。